人がモノを捨てられなくなるプロセス

○柴田陽子¹・中村俊哉² (非会員)

(¹北九州市立精神保健福祉センター・²福岡教育大学)

キーワード: 捨てられない、溜め込み、M-GTA

A Study on the Process of Difficulty Discarding

Yoko SHIBATA¹ and Shunya NAKAMURA²

(¹ Kitakyushu Mental Health Center, ²University of Teacher Education Fukuoka)

Key Words: difficulty discarding, hoarding, M-GTA

目 的

一般的に価値がないとされるものを過剰に入手し、捨てることのできない行為を「溜め込み」(hoarding: ホーディング)という (Frost & Gross, 1993)。「ゴミ屋敷」のように重症化したものは DSM-5 において「強迫症及び関連症群」の中に「溜め込み症 (hoarding disorder)」として新設定された。中尾 (2017) によると「溜め込み症状は早期発症、慢性増悪の経過が特徴であり、10 代に発現し、20 代中頃には個々の日常生活機能を脅かし始め、30 代中盤には臨床的に著しい障害をきたす」という。池内 (2014) は「ホーディングが開始されるきっかけや動機の解明が課題」としている。また、土屋垣内ら (2015) によれば「臨床群と非臨床群の間に連続性が認められている (Timpano et al, 2013)」という。

中でも「捨てられない」症状は「入手」「散らかり」と並ぶ、溜め込みの主な症状の一つである (Frost & Gross, 1993)。不要物を捨てられないこと自体はごく日常的な悩みでもあり、捨てられない理由はアニミズム (池内, 2014) 等、種々報告されている。しかし、「捨てられなさ」が生じるプロセスについては未だ明らかになっていない。本研究では非臨床群の若年層に対し「捨てられなさ」について聴取、捨てられなくなるプロセスについて M-GTA (修正版グラウンデッドセオリーアプローチ) により探索的に検討する。

方 法

調査協力者および調査時期 大学生 130 名に「ホーディング傾向尺度」(池内, 2014) を実施。6 因子の下位尺度得点を基に階層クラスター分析し、3 クラスターを得た。物質多量・処分回避・記憶補助の各因子平均得点が他クラスターより有意に高いクラスター 1 の 65 名のうち 12 名 (男性 3 名, 女性 9 名 平均年齢 18.2 歳 $SD=0.55$) に対し面接調査を行った。調査時期は 2015 年 7 月～11 月であった。

データ収集方法 半構造化面接により、「捨てられない」ことについて、その始まりの時期ときっかけについて確認しつつ自由に語ってもらった。

データ分析方法 逐語記録を分析対象とし、M-GTA により分析を行った。分析テーマは「捨てられなさとその理由、その始まりと推移」とした。

結 果

45 の概念と 4 つの大カテゴリー、21 のサブカテゴリーが生成された。「そもそも捨てようと思っていない (ハードル 1)」し、「さまざまな理由がある (ハードル 2)」ので思いとどまる。捨てると決めても「でも、実行できない (ハードル 3)」と、捨てるに至らない、という【A.モノを捨てるまでの道すじ】が想定された。【D.母の支援】で稀に捨てられることはあるが、「面倒」など【C.モチベーション不足】、さらに「なんか、捨てられない」と【B.捨てない判断へと誘導】され、なかなか捨てられない様子が浮かび上がった。(結果図参照)

考 察

「捨てられなくなる」のではなく、「捨てる行動に至らない」のが実態と考察された。中でも「概念・処分検討未満」や母親との関わりについての言及は、ほぼ全員に特徴的にみられた。ベビー服などが母親の管理下にあったことの延長とも推察され、捨てられなさの起源は人生早期まで遡る可能性が示唆された。また、【B. 捨てない判断へと誘導】する力の存在による葛藤も多く語られた。一方、「概念・きっかけがあった」は小さな概念にとどまった。今後、捨てられる人への調査、分離個体化など発達課題との関連の検討が必要と考えられる。

捨てられない人たちは、「捨てる」までに 3 つのハードルに立ち向かい、捨てない判断へと誘導する力と戦わなければならない。この困難さに理解を示すことが「捨てられなさ」への支援の始まりとなろう。

引用文献

池内裕美(2014).人はなぜモノを溜め込むのか 社会心理学研究, 30(2)86-98,